

旧門司税関

福岡県北九州市門司区東港町

北九州の発展を見守ってきた門司港。ノスタルジックな観光スポットとして再開発された「門司港レトロ」の一角に往時の繁栄を語り継ぐ「旧門司税関」の建物がある。

竣工は1912(明治45)年。前々年に焼失した初代庁舎の跡地に建設された。煉瓦造木骨2階建て、3階には見張り所が設けられている。設計は将来を嘱望されながらわずか30歳の若さで逝去した咲壽栄一。彼を指導したのは、辰野金吾、片山東熊とともに明治建築界の三大巨匠に名を連ねる妻木頼黄である。1927(昭和2)年に3代目となる門司区西海岸の庁舎に移転するまで使用された。その後、この2代目庁舎は数奇な運命をたどる。1933(昭和8)年に民間に移譲され、事務所、倉庫として使用され、その間、両翼の張り出し部を撤去、原型は完全に失われた。戦中は空襲により屋根が崩落する憂き目にあう。その光景を咲壽は天上からどのような心持ちで眺めていたのだろうか。

北九州市によって改修されたのは1995(平成7)年。建物を内部から独立した鉄骨の架構で支え、表紙写真に見えるかつて合同庁舎の貴賓室にあった飾り格子も施されて落ち着いた空間に再生した。復活した外観に目を凝らすと、両翼部と元の躯体のレンガの形状、質感が異なることがわかる。しかし、それもこの貴重な近代化遺産を後世に伝えようとする志を体現しているように見えた。



税関とは国の関所であり、海外との玄関口でもある。旧門司税関は、1909(明治42)年に門司税関が長崎税関から分離独立したのを機に建設。昭和初期までは、税関庁舎として使用されていた。復元された施設内には常設の門司税関広報展示室や喫茶店、関門海峡を行き交う船やね橋を一望できる展望室などがある。

